

日本保育学会五十九回大会に参加して 1

木育フォーラムを振り返る

—木育が伝えるぬくもり・つながり—

高橋 真由美

「木育（もくいく）」という言葉聞いたことがありますか？ おそらく多くの方が初めて耳にする言葉だと思います。「木育」とは、北海道が平成十六年度に設置した官民協働プロジェクトチーム「木育推進プロジェクト」により検討され、報告・提案さ

れた新しい言葉です。このプロジェクトの報告書では、「木育」を「子どもをはじめとするすべての人びとが『木とふれあひ、木に学び、木と生きる』取組であり、子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と木や森のかかわりを主体的に考

えられる豊かな心を育むこと」としています。

ことです。

〔「木育推進プロジェクト」報告より〕

「木とふれあう」とは

「五感と響きあう感性」をバランスよく育むために、心の健やかな発達のために、木の道具を使用することや生活空間に木を増やすこと・木や森と積極的にかわることです。

「木に学ぶ」とは

遊びや日常のなかで、「モノを創造する知恵や力」を養っていくために、北海道の森林や道産の木材、それらを取り巻く社会環境を、学校や地域のさまざまな学びの中に取り入れることです。

「木と生きる」とは

森と木を通じた暮らしの中から「人間が本来生きるための本質的な力」を呼び起こし、私たちの生活を木に寄り添い、共に生きるものにする

生活環境や自然環境の変化によって、人と人、人と自然、人とモノ、モノと自然のつながりが希薄となり、社会や自然にさまざまなほころびが生じている現在、人の「心」を豊かに育むこと、人と木や森とのかかわりを見つめ直し、それぞれのつながりを改めて育むことを「木育」は目指しているのです。

私がこの「木育」という言葉に出合ったのは、日本保育学会第五十九回大会準備委員会の企画会議の席でした。企画案の資料の中に「木育」という言葉を見つけ、その内容に非常に興味をもちました。

「木育」を学会で紹介することを最初に提案したのは、大会準備委員長でもある札幌大谷短期大学の大道子先生でした。大西先生は、木育推進プロジェクトのメンバーであり同大学で木工を専門とし保育

絵画を担当されている清水郁太郎先生から木育の取組に関する話を聞き、平成十七年三月に開催された「木育フォーラム」に参加されました。フォーラムで話を聞いているうちに、森林が絵面積の約七割を占めているという北海道の土地で、木と五感でふれあうことにより感性を高め、人や自然に対する思いやりとやさしさを育むことが、北海道らしさを生かした子育てなのではないかと思つたそうです。そして、第五十九回大会は北海道の特色を生かしたものにしたいと考えていたこともあり、学会の場で「木育」を紹介したいと提案するに至つたそうです。

大西先生からこの話を聞き、その想いに共感した私は、この企画を担当させていただきたいと名乗りをあげました。

この「木育フォーラム」で私たちがこだわったのは、「木育」の取組をパネル展示で紹介するだけでなく、学会に来られる方々に何かしら「木育」を

体感していただくような企画にしたということでした。企画の段階でさまざまな困難に出合いもしましたが、たくさんの方々の協力により、木育パネル展示、木育講演会、木の体験の四つの企画を「木育フォーラム」として行うことができました。

当日、パネル展示には北海道庁の担当者が説明につき、学会参加者の質問に丁寧に答えていました。木育講演は西興部村森の美術館「木夢（こむ）」館長で、木のおもちゃ作家である伊藤英二先生に「子どもたちに伝えよう、木のぬくもりとやさしさを」と題したお話をさせていただき、たくさんの方に参加していただきました。

さらに二日目の午後には、会場の裏手に広がる野幌森林公園内にある自然ふれあい交流館の協力を得て、木育がめざす「五感と響きあう感性」を育む森



の体験プログラムを実施しました。野外での企画に参加者が集まるのだろうか？心配もしましたが、自然ふれあい交流館の方々の「たとえ参加者がひとりでもやりますよ」という言葉に励まされ、当日を迎えました。

実際には、幼稚園・保育園・保育者養成校の先生二十四名という当初予定していた定員をオーバーするほどの参加があり、早春の北海道の森の中で、五感をつかって木を身近に感じるひと時を過ごしました。この日は気持ちの良い青空がひろがっており、一時間半ほどの時間ではありましたが、参加者の一人ひとりが生き生きとした表情でプログラムを体験され、終わる頃には参加者の中に連帯感のようなものが生まれていたことが印象的でした。

多くの学会参加者の目にとまったであろう、木のおもちゃの一般公開は両日とも午後からの開催でしたが、近隣の幼稚園児などあわせて八十四名の子ど

もたちとその保護者が木の砂場、魚釣り、パズル、ままごとハウス、木馬などで楽しいひと時を過ごしていきました。

これらの木のおもちゃはすべて木育講演をしていただいた伊藤英二先生がデザイン・制作されたもので、伊藤先生のアイデアが随所に生かされた温かみの感じられるものばかりでした。特に、道産木材で作った木の玉を敷きつめた「木の砂場」の感触は大人にも好評で、学会参加者の中にも子どもと一緒に砂場にはいり、その感触を楽しんだ方も多かったです。うに思います。

これらの木のおもちゃで遊ぶ子どもたちの表情、遊び方を見て感じたことがあります。それは、木のおもちゃに触れた途端に、ほとんどの子どもがなんとも言えないうれしそうな表情を見せ、生き生きとももちゃとかかわっていたということです。特に「木の砂場」に一步足を踏み入れた瞬間の子どもた



▲木の砂場の感触を楽しむ子どもたち

中には、見ているこちらでも思わず微笑んでしまうようなやわらかでやさしい表情が見られました。さらに、どの子どもも、おもちゃの扱いがとても丁寧であることにも驚きました。なぜだろう？ と考えていたのですが、その理由が伊藤英二先生の講演をお聞きしてわかったような気がしました。

講演の中で伊藤先生は、自分は子どもたちからいつも夢をもらっている、その子どもたちが木のおもちゃのやさしさや温かみに触れ、自然のもつ本物の良さを感じながら生き生きと遊べるものを作りたいと話されました。先生が作るおもちゃにはそういう子どもたちへの想いが込められているのです。おもちゃを手にした子どもにはその想いがしっかりと伝わっていたのではないのでしょうか。おもちゃに触れた瞬間、子どもが見せる表情、遊んでいる時の様子、それは伊藤先生が心を込めて作ったということが無意識のうちに感じているからこそ見られた様子

ではないのか、私はそう思いました。大量生産、大量消費の時代に子どもたちにはなかなか伝えることができない、モノに込められた人の気持ちを伝えることができるのが、ぬくもりあふれる木のおもちゃなのかもしれません。

第五十九回大会のテーマは「拓く・展がる・つながる」でしたが、この「木育フォーラム」も木を通してさまざまなつながりについて考える場にしたと思います。来場した子どもたち、講演を聞いた方々、パネル展示を見た方々、そして森での時間を過ごした方々は、さまざまな角度から「つながり」を感じたことと思います。私は保育において、子どもたちに「私たちはまわりのいろいろなものつながりながら生きているのだ」ということを伝えることが大切だと思っています。「木育」はまさにその「つながり」を育むことを目指すものです。新しい言葉ですが、その根底には、昔から大切にされ

てきたことを見直す、ということがあるのかもしれない。

この企画を通して、新しい「つながり」が生まれたことも大きな成果でした。木のおもちゃを貸し出してくださった伊藤先生、それを運んでくださった株式会社北樹さん、会場設営・撤収作業やパネル展示に協力してくださった北海道庁の職員のみなさん、森のプログラム体験を実施してくださった自然ふれあい交流館の職員さん、おもちゃの一般公開のためにお手伝いいただいた札幌大谷短期大学の関係者のみなさん、この企画に携ってくれたすべての人が「木育」の名のもとに協力しあい、つながりあえたと思います。このようなつながりの尊さ、そして「木育」の理念がこれからの保育の中に根付いていくことを期待します。

(藤女子大学)